

モダニズムの忘れ形見： ホープ・マーリーズ『パリ』試訳（1）

小 原 俊 文*

A Translation of a Modernist's Masterpiece: *Paris* by Hope Mirrlees

Toshifumi Obara

resumes : A long forgotten poem, a masterpiece of Modernists' poems, *Paris: A Poem*, has now been highly appreciated. The Hogarth Press had published only 175 copies of it in 1920. And Mirrlees herself forbade reprinting the edition for fear of some blasphemous lines of it. In Japan she has only been known as a writer of a novel, *Lud-in-the Mist*. In this paper, I tried to translate the poem into Japanese for expecting to draw a general attention of Japanese readers and scholars to this celebrated work and for hoping a fair appreciation of her achievements in the Modernism.

Key Words : Hope Mirrlees, Paris : A Poem, Modernism, Japanese translation

1 ホープ・マーリーズ：詩『パリ』のレトリックとテーマ

Helen Hope Mirrlees (1887-1978) に関しては、文学辞典などでの記述がまったく見られず、その名前がほとんど知られてはいない。彼女の文学上知られている作品は、SFまたはファンタジーのジャンルに入る“Lud-in-the Mist”（邦題『霧の都』）などの数作にすぎない。

20世紀初頭に生じたモダニズムを対象とした研究は文学のみならず、視覚芸術、音楽、身体表現などのより広範な芸術の分野を網羅し、社会学的な側面からも多岐かつ精緻な研究が進んでいる。そうした一連の研究におけるホープ・マーリーズの再評価は、彼女が1920年5月にわずか175部出版した詩“Paris : A Poem”を中心に始まったばかりである。現在はとくにヴァージニア・ウルフ研究との関わりでその名が挙がっているが、その中心的な研究者はイギリスのJulia Briggsであろう。彼女のマーリーズに関する論文は単著“Reading Virginia Woolf”（2006）とBonnie Kime Scott 編による“Gender in Modernism”（2007）に公表されている。ブリッグズは、後者で『パリ』に詳細な注釈をつけ、この作品の再評価に大きく貢献している。

一方、おそらく日本でいち早く彼女のモダニズム文学上の意義を指摘したのは、河野真太郎氏の2007年3月の日本ヴァージニア・ウルフ協会例会での口頭発表、およびその原稿に加筆した論文「都市の農夫：ホープ・マーリーズと遊歩者のユートピア」（2008）が嚆矢であろう。氏は、マーリーズの詩『パリ』を一部翻訳して紹介し、この詩をフラヌール詩と定義して、作品の持つ性格から、盛期モダニズムの都市表象における土着性と、この土着性への志向を初期モダニズムがすでに胚胎していた点をテーマとして論を展開している。その立論の過程におい

* 総合人間科学部 表現文化学科

て、詩『パリ』の主に表現上の特徴について、ブリッグズを参照しながら、以下の指摘を行っている。

- 1 商業的文物利用：都市の日常的文物を書きこむという、モダニズムで今やおなじみの手法の、当時における先進性は強調されるべきであろう。
- 2 新しきものと古きものの混淆：…（中略）…パリはこういった、過去の死者から最近の死者にいたるまでさまざまな死者たちが存在する町としても描かれる。
- 3 形式上の断片性と都市の認識：この詩のモンタージュ風の断片性は、都市のショック的認識を「リアリズム的に」写し取ったものであり、それは内容と形式の両者において実現されている。
- 4 都市の混淆性とパノラマ化：以上の特徴が何のために存在しているかといえば、それは都市の混淆的な経験を包摂し（または美学化し）、都市をその居住者にとってのユートピアとして表象することである。

以上の指摘は、河野氏自身による項目に従った要約であるが、これ以外にも、章を改めて、二点の指摘が見られる。一点は、「フレーザーを代表とする当時の人類学はヨーロッパの過去を再構築し、疎外されて意味を失ってしまった現在の習慣・制度のうちに、ヘブライズムとヘレニズムという共通基盤と失われた過去を取り戻すことを目的としていた。この人類学的言説が文学に大きなインパクトを与え、エリオットに典型的に現れているように、神話的過去をユートピア的未来へと投射するための媒介となった。」という指摘である。

また、二点目は、「同時代の多くの文化論者が商業文化への嫌悪と有機体的社会への郷愁をそのユートピア的ヴィジョンの根拠としたのに対して、マーリーズは都市の現状を単に否定することなく、そのただ中から別の物語を紡ごうとしたのではないか。この広告と儀式の並置からはそのような可能性が開ける。」と述べることで、マーリーズと一方で有機体的社会論へ傾斜していくエリオットとの差異を強調する。

本稿は、河野氏の論文およびブリッグズの注釈を参考にして、この作品を日本語に訳出しようとした試みである。おそらく全文訳は初めてであろうと思われるが、試訳どころか仮訳といった趣のものである。しかし、作品の魅力を伝え、かつ今後のマーリーズに関するより精細な研究が現れることを期待して、あえて自らの非力も省みず訳出した。ただしこの20ページ445行に及ぶ詩行の邦訳をすべて掲載するには紙面の余裕がないため、今回は前半部の272行までの掲載に留め、稿を改めてマーリーズとエリオットを比較しながら、彼らのモダニズムにおける意味を探ってみたい。

2 『パリ』 試訳（前半部 1行目～272行目）

私には一語文が必要だ。

北南線
ジグザグ

リオン・ノアール
カカオ・ブルッカー

エトルリアの墳墓の黒人を刻んだ壺たち

バック通り（デュボネ）
ソルフェリーノ（デュボネ）
国会議事堂前

ブレック、エック、エック、エック、コークス、コークス
今、セーヌ川の下をくぐっている

デュボネ

ビールと叫ぶ深紅の女が、パトモス島の聖ヨハネの耳を劈く

マダム、御降りになりますか？

自分の体重をたびたび量る人は、自らを良く知る人
自らを良く知る人は、健康な人

コンコルド広場

見つけられない
もっとゆっくり探さなければ

チュルリー　　公園　　の　　彫像たちは　　忘我　　の　　面もち
画家　　たち　　が、　　あまりにも　　長時間　　に　　わたって、
彼等　　を　　じっと　　見つめ　　すぎた　　から

黒いツナギ服を着て、遊んで汗で手をベタベタにした少年たちは、枳の木の新しく芽を出して巻いた若葉のようで、回転木馬にまたがりその頭が曲がってしまうまで何度も何度も乗り回す。

彫像の頭に止まった鳩たちが
そのまま石に変えられる。

シテーレ島への旅立

あのニンフたちは、無害です、

彼女たちの柔らかな唇を恐れなくともよい。
パストールのような人がガリア人に
ニンフたちの咬傷に対する免疫をつけさせたのだ。... 見よ

ガンベッタは
赤い飾りボタンをフロックコートのボタン穴につけて
夫婦のように親密な呼びかけ
でも、それで意味が通じる。

フランス精神の彫像が彼に身を寄せて
ひそひそと囁く
秘密の話を
精妙な 意味ありげな
陳腐な 真偽のわからぬ

第12代アルバ公爵夫人の話を
エッフェル塔のように長々しく
ハッシッシの酔いのように深く
物憂げな優美な指先で
姿のみえぬマジに
小さな白いマルチーズを指し示す

南仏、ルーブル、セーヌのような
灰色とオリーブ色の背景...

象牙のペーパーナイフ、柄にはライオンの彫り物
ライシストラータが一本持っていたが、こうした細工は
あきらかに帝国のもの

その...

私には凱旋門が見える、
ジュリアス・シーザーの夢のように明確でかつ空虚な
厳密な幾何学上の法則を嘲り
カイユボテ画廊の壁に向かって堂々と歩みだす
そしてまだまだ、続く...

エトワール広場は嫌い
ブローニュの森林公園は退屈

宝石をちりばめた甲羅の亀たち
足からとげを抜くローマの少年
裸足のルカミエ夫人の一団が
われらの時代のシャトーブリアンを求めて嘆く。

しかし... ごく最近では、
まるでブリタニー出身の大貴族のような顔をして
古いサン・トノレ街をみすぼらしいなりをし、我がもの顔でうろつき回る

オーベルニュ出身の男が自分の売る粟に
オーベルニュのすべての山をつめたように...

パリはホームシックになった巨大な農民
胸のなかには数千の田舎の村を抱え持つ。

隠れた中庭は
ロータスの葉陰で牧神たちがかすかな音をたてて葦笛を吹き
格子に蔓が絡みつ
小さな神々が生まれる秘密の谷間だ。

人はしばしば、雄鶏が鳴くのを耳にする
ド、ド、ド、ミイー

鶏は町を歌うことができない ——
古代のヘシオドの亡霊が暇に任せて
アケロンの無限の倦怠の中で憂鬱を感じ
『労働と日々』を懐かしく思う... 聞け！

この年のかわいらしい精霊が
硬直してこわばり
何エーカーもの茶色の野原に横たわり、
その古式ゆかしい敷物の引き締まった直線が
鋤によって優雅に刻み込まれる...

そして小さなものたちの存在 ——
お守りを首にかけた子供たちが
鳩遊びをして
赤い帽子
青い上着
そして陽気な聖者たち...

ボン・マルシェでは
春のご婦人用
外出着
売り出し中

スズカケの木の金色の青年たち
教会では四旬節のあいだキリストと聖者たちが
薄紫色のヴェールで包まれる。

はるか遠く庭では
クロッカス
チオノドクサ、セルビアのおとぎ話のお姫様
それから
金細工師たちの傑作 —— スズラン
やがて
バラの花がジプシーや、荷車や、巡礼たちを見つめる

いつだって
匂いのないリヨンのバラ
氷のように
人工的で
市長夫人の名を冠されて。...

アングルはジャックマール・アンドレ夫人の肖像を描いたのかしら。

ルーブル美術館では
アヴィニオンのピエタ
オリンポスの神々
ジャイルズ
マンテーニャの七つの大罪
シャルダン派の作品

これらがすべて、地下の5年間の眠りから覚めて
闇の中で生白くもならず、つぎつぎに静かに起き上がる。

まるでダンカン王のようにぐっすり眠って。

ウィルソン大統領は、犬のようににやりと笑い、街を駆け回り、
無邪気に喜んで、ガルガンチュアの洪水のような小便を嗅ぐ。

ポプラの新芽は黄金の蛹
緑の蝶のバレーが
すぐに始まる。

復活祭で演じるカトリックの大人形劇場の物語では
金切り声、
槍の一突き
血生臭い汗 —
幼子イエスも本当はおしっこをする

ライラック
春はソロモンの妹だ。まったく胸のふくらみがない。

最高級の牛乳
これこそ
ランブイユの農場製

電話案内はここに

照会されたし

調整食品販売
最高級コールド・カット

アペリティーフ
糖尿患者用食品
24時間以内染色

紳士淑女の皆さま

ヘルメスを祭る小さな神殿；
その神殿の境内の広さには
優れた空間の感覚がある。

守銭奴アルパゴの血の黄金の一滴
不信心の拡大から保護されて

サイホン、ベルモット、ボック・ビール、煙草、の中におかれた
大きなライラックの花束

紳士、淑女の皆さま、

決してドアを閉めないで下さい
お願いです
プリマス空調機作動中

青いリンネルのスーツを着た労働者たちが、大理石のテーブルに座って、
議論している；

8時間労働
青髭ランドリュウはサディストだったのかどうか
新サーカスの学者アザラシ
エミール・コタン...

ボシュエの響きが亡き王妃たちを賛美して歌う

時間に正確な
戦闘的な
週ごとの
怪物のような

古代ローマの軍団が
兜に羽飾りをつけ
不可視のままに
ガリアの地で最後の戦闘をする。

パール・ラシューズ墓地の亡霊が
街路を歩き回っている。
Hの文字の縁取りをつけた黒いカーテンに身を包み
紙の花輪を首に架け
その姿は麗しく、怖ろしく、
税関吏ルソーの親友
協調政策はこなごなに碎かれ
舞台には死体が折り重なる。...
優しく屈強な男たちよ

ひどくゆがんだ骨組みのその幻に青銅版のモットーが刻まれている

名誉の戦死者
そしてまだ若い寡婦たちが嘆く
哀れな男たち！

哀れな男たち！

そして無口で不快な声をしたプチ・ブルのご婦人がたが、釣銭を数え上げ、紳士淑女の皆さま、と呼びかけている。彼女らの心は、荒廃したピカルディー地方そのもの。…彼らは私たちとは違い、墓場を荒らす鬼のように、われらの友人たちを葬り、貴金属の何倍も価値のある友人たちを、しかし彼らは死んだ。

決して二度と再びマルネ河は
幸福な川岸の間を流れないだろう。

パリの大通りに腰を下ろすのは気持ちが良い —

そこでの臭いは
下水道
生暖かいタイヤのゴム
白粉
アルジェリアの煙草

アルジェリア歩兵の青と赤の制服を着たムッシュー・ジョルダン、
トルコバレエ団の主席舞踏家だ。

「ヤッ、すんばらしい。
ママムーシュのようだ

アメリカ人たち — 『ついでにいえば、かつてアレppoで...。』

平和な謝肉祭の

多くの謝肉火曜日や肉の火曜日；

クレープ地の喪のヴェール
たった今「チョコ・レート」という語を
発音したかのように、口先の慰め言葉で口をすぼめ、
『女というものは、腰を揺さぶって歩く。』
爬虫類のような眼差し
アッシリア風のおご髭
上側が布製の長靴

辛らつな小さな民族、その頭脳はアラブ人がいうには、
神の精霊からでた三匹の鱸の一匹だったという。

ハイ、ハイ、ハイ、それは面白そうですね。 — それだけの価値がありますよ。

チーズはあまり合理的な食べ物ではありません。

ア、ア、ア、ア、ハイ、こちらのお方は感じの良い殿方ですね。

すべての女性がアンナ・カレニナに自分自身を見出すべきだと思います。

チュートン人のカタレプシーなんて、ありえない

何時

水面下で

細胞に細胞が

実験

非常に時間をかけて

形成されつつ

何か美しいもの、— 荘厳な — 巨大な

そんなものの招来が.....

はっきりしない、もたついた演説 — 膨大な呪いの言葉

五月一日

こ

の

日

に

は

ス

ズ

ラ

ン

は

一

輪

も

あ

り

ま

せ

ん

その甘やかな肉体を求めて

マリアとアルテミス、二人の処女が儀礼的に争った

邪悪な四月の月

ストライキの静寂

雨

ルーブル美術館は霧にけむり

小原：モダニズムの忘れ形見：ホープ・マーリーズ『パリ』試訳（1）

すぐにでも透明になって消え入りそうだ
それでもまだカルーセル広場の不思議な
小島のような庭園を照らし出している。
セーヌ川、老いたエゴイスト、海に向かって静かにくねって流れ下る、

水草と雨を思い起こしながら
緩慢な水っぼい眠りのなかに夢が現れるとすれば
その夢はカワセミの青みがかった亡霊

参考文献

- Mirrlees, Hope. *Paris: A Poem*. London: The Hogarth Press, 1919. refer to an electrically duplicated edition at <http://www.wolfmagazine.co.uk/16/paris.htm>
- Briggs, Julia. *Essay 5*, compiled in *Reading Virginia Woolf*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006.
- _____, "Hope Mirrlees and Continental Modernism", in Bonnie Kime Scott, ed. *The Gender and Modernism*, 261-303. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2007.
- 河野真太郎、「都市の農夫：ホープ・マーリーズと遊歩者のユートピア」、遠藤不比人他5名編集、『転回するモダン』所収、135 - 163. 東京：研究社、2008.

